

平成22年5月3日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520026

研究課題名（和文）ヘーゲルにおける関係の存在論の研究

研究課題名（英文）Study of Relational Ontology in Hegel

研究代表者 久保陽一（Yohichi Kubo）

駒澤大学・総合教育研究部・教授

研究者番号：70119098

研究成果の概要（和文）：ドイツ観念論の哲学者たちは「生」を「認識」において再構成しようとしたが、その中でヘーゲルの関係の存在論が「生」・「導入」・「体系」の連関のうちに成立したことを、解明した。同時にブランドム等の分析哲学的なヘーゲル解釈の意義と問題点を明らかにした。2009年3月に国際シンポジウム「ヘーゲルの体系の見直し」を駒澤大学で開催し、外国人ゲスト5名が参加した。2008年3月にフィーバーク教授を、2009年4月にハーン博士を、2010年3月にヤメ教授を招き、講演会を行った。

研究成果の概要（英文）：The researcher explained, that a relational ontology in Hegel is based on the relation of “life”, “introduction” and “system” with the german idealists for a background, who “life” in “cognition” reconstructed. On the other hand er clarified significances and problems of analytical interpretation of Hegel by Brandom etc.. Er organized the international Symposium “Reexamination of Hegel’s system” in Komazawa University in march 2009, in which 5 foreign guests participated. Er invited Prof. Vieweg in march 2008, Dr. Hahn in april 2009 and Prof. Jamme in march 2010 to lectures

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：ドイツ観念論、ヘーゲル、存在論、論理学、関係

1. 研究開始当初の背景

ヘーゲル研究は1960年代頃からドイツなどで新たな前進を見せ、文献学的発展史のおよび同時代の諸思想の布置的連関から

新たな光が当てられるようになってきた。発展史的には、初期の宗教的—政治的思想から哲学体系への展開においてヘーゲル哲学の意味とその叙述の性格や構成や方法が新た

に解明されるようになり、布置的連関の研究ではヘルダーリンやドイツ観念論の動向の中でヘーゲル哲学の意味が捉えなおされるようになってきた。

研究者もこれらの研究動向に学びながら、まず初期ヘーゲルの自筆草稿に基づいて研究し、彼の最初の形而上学的思想は「人間と自然との対話的連関」に基づく「批判的実践的存在論」を意味するという理解にいたった（『初期ヘーゲル哲学研究』、東京大学出版会、1993年）。さらに発展史的研究と布置的連関の研究をヘーゲルのイェナ時代半ばまで及ぼし、当初の「批判的実践的存在論」が「絶対的認識」の構成に極まる「関係の存在論」へ展開する所以を明らかにした（『ヘーゲル論理学の基底』、創文社、1997年）。ここで「関係の存在論」というのは、概念が関係の様式を意味すること、また関係から独立に存在する項と項の間の「外的関係」において、項にとって関係が本質的意味をもつ「内的関係」が見出され、そこに「弁証法」と「自己内反省」が生じるというものである。さらにその後、カント、フィヒテ、シェリング、ヘルダーリンの研究において、超越論的観念論における表象の客観的実在性の根拠づけの動機が、ヤコービの影響を受けて「生と認識」という連関において展開され、その背景のもとでヘーゲル論理学の内容と方法も成立した事情を明らかにした。しかし、以上の研究はまだヘーゲルのイェナ論理学までに関するものであり、後期の『大論理学』に直接触れるものではない。

それと同時にヘーゲル論理学における関係の存在論は分析哲学と通ずるところがある点にも注意を払う必要があることが、見えてきた。かつて分析哲学はヘーゲル哲学に対して拒否反応を示してきたが、クワイン、セラーズの論理実証主義批判とプラグマティズム、デヴィッドソンの形式—内容の二元論に対する批判を機縁として、マクダウエルやブランドムはヘーゲルの全体論や反二元論的認識論を高く評価し、ヘーゲルの関係の存在論に共鳴を見出しつつある。研究者も以前からヘーゲルと分析哲学との関係には関心を抱いていた（「ラッセルのヘーゲル批判について」、「実証主義的および言語分析的な形而上学批判の問題点」など）。ただし、最近の分析哲学的ヘーゲル研究は『精神現象学』解釈に偏っており、論理学を十分に取り上げていない。しかしそもそもラッセルやカルナップの存在論は、ヘーゲル論理学における関係の種々の様式の連関の理解に欠けるところに問題があったように思われる。したがって、ヘーゲル論理学における関係の存在論を解明することによって、最近の分析哲学的ヘーゲル解釈を補足し、ヘーゲル論理学の現代的意義を一層明らかにすることができよう。

そこで、ヘーゲルの関係の存在論の研究課題は、主に二つあるように思われてきた。第一は、「生と認識」の連関の中で成立したイェナ論理学における関係の存在論がいかに関後期の論理学に展開したかを解明することである。第二は、この関係の存在論を分析哲学的な関心事と結び付けて、その現代的意義を考察することである。そのような問題意識で今回研究に取り組んできた。

2. 研究の目的

ヘーゲルの関係の存在論の特質について、（1）ヘーゲル自身の発展史、（2）同時代の諸哲学との連関、（3）現代的意義という観点から総合的に解明すること

3. 研究の方法

ヘーゲルの『精神現象学』、後期の論理学、ドイツ観念論の関連するテキストとその二次文献を読み、論文にまとめ、それを通して外国人研究者を含む種々の研究者と討議すること。

4. 研究成果

（1）①ヘーゲルの「現象学の論理学」の特質を解明し、後期の論理学を見通す展望を開いた。「現象学の論理学」についてはペゲラー、フルダ等従来の研究では、意識の形態にどのような論理のカテゴリーが対応するかが詮索されるのみで、「現象学の論理学」全体の理念や方法には十分に立ち入られていなかった。だが、1804/05年の「形而上学」による「論理学」の根拠づけの連関が、ほぼ「精神現象学」と「論理学」の連関に再現されている。そして意識諸形態に対応する論理学的カテゴリーの系列には二重のもの、すなわち、論理学的継時的対応（「存在」、「相関」、「生と認識」、「知る知」、「精神」、「自己について知る精神」）と形而上学的共時的対応（「即自存在」、「対自存在」、「即かつ対自存在」）とが見られる。そのような二重性の故に、「現象学の論理学」はイェナ論理学から後期の論理学にいたる過渡期の段階を表していたと考えられる。

②同時に、論理学を含む体系そのものが、「生」・「導入」・「体系」の次のような連関の結構において成り立つ所以を明らかにした。第一に、哲学は始まりを終りにおいて根拠づけるという意味で、「思弁」において自己完結的体系でなければならない。第二に、この体系は「生」の「認識」すなわち学的再構成という意味を含んでおり、「生」の現在の状況に開かれたものでなければならない。第三に、「生」の現実と「思弁」における自己完結的体系とを媒介するために、「弁証法」と「自己内反省」の論法にもとづく「導入」が求められる。

③2009年3月3, 4, 6日に駒澤大学で

国際シンポジウム「ヘーゲルの体系の見直し」(Wie systematisch ist Hegels System?)を開催した。外国人ゲスト5名(アルント、ヘラー、ロージャ、エンゲルハルト、アンゲールン)と日本人発表14名がドイツ語で発表し、延べ75名の参加者を得た。わが国では哲学でこのような規模の国際研究集会が行われるのはまれで、国際的交流に寄与したと思われる。発表原稿の論集のドイツ語版をドイツのフィンク社から、ヤメと久保の共同編集で出す予定である。日本語版はゲストの原稿については『ヘーゲル哲学研究』第15号と第16号で、日本人発表者の原稿は、久保陽一編『ヘーゲルの体系の見直し』(理想社)で近日中に公刊する予定である。

(2) ドイツ古典哲学は概して表象の客観的実在性の根拠づけという課題を、「生」の「認識」という問題次元のもとで追求したものであることを解明し、その成果を『生と認識——超越論的観念論の展開』(知泉書館)にまとめ、近く公刊する予定である。その要点は次の三つである。

①カントにおける表象の客観的実在性の観念論的根拠づけのモチーフが、フィヒテにおいて「感情」にまで遡及され、それをさらにシュリングは「自己意識の歴史」の次元で展開した。だがラインホルトは意識の主観的立場から「絶対者」の立場に転換して、知の根拠づけを絶対者の立場から展開した。ヘーゲルも知の客観的実在性の根拠づけを意識の経験の次元においてだけでなく、主に「思弁」の領域で概念相互の連関という次元において展開するようになる。

②このような根拠の変動はヤコービの影響によるところが大きい。ヤコービは1799年3月にフィヒテ宛公開書簡で、観念論による表象の客観性の根拠づけを「ニヒリズム」として批判したが、その挑戦を受けて観念論哲学者は、超越論的観念論を「生」の「認識」として自己了解するようになり、表象の客観性の根拠づけを人間的自我からではなく絶対者から行うようになったと思われる。

③「生の認識」には原理的に困難が含まれているものの、懐疑主義や神秘主義に与せず、所与の根拠づけによる学的体系、また導入構想によって、困難を克服しようとしたと考えられる。

(3) ブランダムやフォルスターの分析哲学的ヘーゲル解釈を研究し、関係の存在論に関してその意義と限界を明らかにした。

①ブランダムはヘーゲルの全体論を、「弱い意味の全体論」、しかも「意味論的全体論」という性格のものとして評価するとともに、ヘーゲルの相互承認論を「規範的プラグマティズム」の意味に解釈する。このような解釈

はヘーゲルに即して必ずしも無理ではないし、現代の分析哲学の困難を打開する意義をもつかもれないが、種々の点でヘーゲルの思想を見落としている。

②フォルスターは『精神現象学』の叙述のうちに、クリプキが後期ウィトゲンシュタインの議論に認めた「懐疑的パラドックス」と「懐疑的解決」と同様な論証過程を認めた。この点は斬新であるが、しかし、「意識の経験」の過程をもつばら意識に内在的な過程とみなし「我々哲学者」の観点を無視したのは、問題である。

③ブランダムは『Articulating Reasons』の読書会を毎月一回のペースで二年前から始めている。いずれ翻訳を出し、ブランダムを招いて、討論する機会を設ける予定である。

5 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 久保陽一、ヘルダーリンにおける「生の認識」、駒澤大学総合教育研究部紀要、査読なし、第4号、2010、1-19
- ② Yohichi Kubo, Die Eigentümlichkeit des transzendenten Idealismus Schellings im Vergleich mit Kant und Fichte, The University of Tokyo, 査読なし、第32号、2008、89-100
- ③ 久保陽一、「現象学の論理学」再考、理想、査読なし、第679号、2007、40-50
- ④ 久保陽一、ヘーゲルにおける「ホーリズム」と「プラグマティズム」——ブランダム『精神現象学』解釈について、駒澤大学総合教育研究部紀要、査読なし、第2号、2008、1-19

[学会発表] (計6件)

- ① 久保陽一、無限性と認識活動——超越論的観念論としてのヘーゲルの論理学と形而上学、国際シンポジウム「ヘーゲルにおける精神と世界」、2010年3月8日、新潟大学
- ② 久保陽一、ラインホルトにおける超越論的観念論から合理的実在論への展開をめぐって、日本フィヒテ協会第25回大会シンポジウム、2009年11月12日、明治大学
- ③ Yohichi Kubo, Idee, Bedingung und Verfahrensweise des Hegelschen Systems. Aus den Jenaer Gedanken, 日本ヘーゲル学会主催国際シンポジウム「ヘーゲルの体系の見直し」、200

- 9年3月3日、駒澤大学
- ④ 久保陽一、ヘーゲルにおける「ホーリズム」と「プラグマティズム」——ブランドムの『精神現象学』解釈について、東北哲学会、2007年10月20日、東北大学

[図書] (計1件)

- ① 久保陽一,他、Könihsausen & Neumann, *Leben und Geschichte*, 2008, 9-23

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 陽一 (Yohichi Kubo)
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：70119098

研究分担者、連携研究者なし